

1 天 乾

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



天 天 乾

天行は健 | 乾は剛健、充実、能動、男性的である。自然では天の働き、人間では壮年期。盛運を示すが、責任は重く緊張も絶えない。また物盛んなれば必ず衰う。頂点に達することは衰退への第一歩である。調子に乗りすぎぬよう慎重を要す。《白蛾》今まで地中に潜んでいた龍が漸くその時節を得て天に昇ることができるようになった象。



天 沢 履

上に天あり下に沢あるは履 | 履は履（ふ）む、実践の意。天は上の高きに在り沢は下の低きに在って、上下尊卑の分が正しい象。人の履み行ふ処は礼ゆえ履を礼の卦とする。兌の柔弱なる身を以て乾の剛健なるもの後ろから履み行く象であり、危うくかつ難しとする。然しながら兌の和悦恭敬の道を以て臨む時は終にその危難を免れて能く履み行くことを為しおわせる。《白蛾》虎の尾を踏む象。



天 火 同人

天と火とは同人 | 同人は人と志を同じくする意。天の気も火と同じく上に昇る性があり、大小の差こそあれ、共にその光で物を照らす象。一爻だけが陰で、他の五陽爻が同じくこれに与している。万事自己一人の私のためにすることは不吉であり、正明なることを人と同じくして為すことは吉とする。《白蛾》闇夜に燈を見出した象。



天 雷 无妄

天の下雷行き物ごとに无妄を与う | 无妄は至誠。无妄はいつわりなきこと、道理として自然とそうなることを意味する。期待や作為を捨てて成り行きのままに身を委ねる。望外の福。思いがけない出来事にぶつかっても動揺したり、作為を働かせたりせずそれを受け入れる。《白蛾》誠にしていれば凶いことはないが、俗人は天理に順い誠に徹すということができないので波乱を生じることになる。



天 風 姤

天の下に風あるは姤 | 姤は邂逅の逅と同音同意。偶然の出会い、思いがけなく出会う。消長卦の一つで、夬の卦において高位に居た一陰爻を決し去ったのに、思いがけなくまた一陰が下に現れた。思いがけぬところで災禍に見舞われることも。一人の女が五人の男に会う。女として甚だ壮ん。彼は剛健にして我を容れないが、我は巽順にして服従するので、彼も拒むことができず遂には相会うことになる。



天 水 訟

天と水と違い行くは訟 | 訟は争訟、裁判。外卦は天で上り内卦は水で下り互いに相背く象。彼と我と背き違えてその曲直是非を争いこれを公に訴える。上は乾剛にして威厳に過ぎて寛容の情が薄く、下は坎険窮迫に堪えずして公に訴える。訴えをなすというのは自分の方に道理があると思ってするのだろうか、結果としては却って自分自身を苦しめることになる。程々の処で思い止まれば吉、最後まで我を張る時は必ず凶である。



天 山 遯

天の下に山あるは遯 | 遯はのがれる、退避。陰の小人の勢が次第に盛んになる時で、陽の君子は山に遯れ退く象。《白蛾》貴人が山に隠れる象。



天 地 否

天地交わらざるは否 | 否は塞がって通じない。天地が交わらず、陰陽の気が閉塞して万物その生を遂げ得ない。人間で言えば、君主と臣下と、情意隔絶して天下治らない状態。卦の形は脆弱な基盤の上に剛強が乗っている砂上の楼閣。《白蛾》月に霧のかかる象。冬の鶯が春を待つ意。

2 三 沢 兌

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



沢天 夬

沢天に上るは夬 | 夬は決定、決断、切り開くの意。

消長卦の一つで五陽の君子が進んで一陰の小人を決し去る象。沢が天の上に昇っている、沢の堤が決れて下に溢れ注ぐことは目に見えている。乾の至剛を以って兌の至弱なるものを決し去る意。決定する意。志を達する意。壮盛の意。対敵を降伏させる意。強進すれば禍に遭う。《白蛾》蛟龍が天に昇る象。強い運ながら剛情すぎるのでつまずきが多い。



沢沢 兌

麗（つら）なる沢あるは兌 |

兌は悦び、少女、口。喜び楽しむ。希望に輝く喜びの卦ではあるが、物事に締まりがなく埒のあかぬ意も含む。

毀折ともし、小事は通達して喜ぶけれども大事は中途にて挫折の恐れがあるとか、口では甘いことを言い、表面は良さそうだが、内実が伴わないことが多いとみる。



沢火 革

沢の中に火あるは革 | 革は改革。改め変わる事。

水と火と相滅し、或いは兌の少女と離の中女と同居して相剋し、何れか一方斃（たお）れて、後に残ったものが、旧を革めて新しく事を為す象。旧を去る意。火の上に金がある象で、必ずその金が革められ、改めるのに費えがある。

《白蛾》この卦は改革に吉の意。万事旧を捨てて新しいことを成すところに改革の喜びがある。



沢雷 随

沢中に雷あるは随 | 随は従う。

万物を鼓動作興させる雷が沢中に潜む時で、雷も時に随って陰柔の沢の下に下ってこれに随う象。下震動・上兌説で、こちらが動いてゆき、向こうが喜ぶ。自分が虚心に他者に随えば、他者もまた自分に随って来る。

上兌は少女・下震は長男で、中年男が少女に魅せられて従っているとも、実力ある者が一步譲って自分以下の者に従っているとも。



沢風 大過

沢木を滅すは大過 | 大過は大なるものが過度に盛ん。

巽木が沢中にある象で、沢の水は能く草木を養うものであるが、その水中に久しく過ぎれば樹木も腐り没するに至る。二陰の間に強剛なる四陽を載せ、恰も棟が己の力よりも大に過ぎたるものを載せて、その重さに耐えかねている象。事業など分に過ぎて堪え難い意。

相互にそ向き合う象。《白蛾》繁華な街へ馬を乗り入れた象。



沢水 困

沢に水なきは困 | 困は困窮、進退窮まった時。

本来沢は水を蓄える地であるべきにかかわらず、蓄えるべき水が地下に漏れ去って沢の水が涸れた象。水が涸れたら万物皆困る。困の字は囲いの中に木があってその根は伸びることができずに屈み曲がり、その幹も枝も葉も花も細く小さく畏縮して困窮する。三陽爻が陰爻に蔽われ苦しんでいる。君子が小人に蔽われ思うに任せぬ。八方塞がり。《白蛾》鳥が枯れ木に鳴く象。



沢山 咸

山の上に沢あるは咸 | 咸は感。相感・交感。

沢の水気が山の樹木に通じ湿して繁茂させる意。山沢交感して二氣相通ずる意。兌は悦びで少女の象・艮は止まるで少男の象、少男・少女相求めて感応する。己を虚しくして教えを受ける。

《白蛾》鶯吟じ鳳舞う意。



沢地 萃

沢地に上るは萃 | 萃は聚（あつ）まる。

地上に沢のある卦で、地上に水の潤いが十分あって、草木その他がよく聚り生ずる象。砂漠のオアシス。

《白蛾》鯉が龍門に登る象。物が集合し繁盛する意。

3 三 火 離

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



火 大有
天 有

火天上にあるは大有 | 大有は有するところが大きい、大いに有つの意。
六五の一陰が柔和な包容力で五陽剛を統べ有つ象。天の上に日がある象で、遍く万物を照らして悉くを繁昌させ、よくその大を有つ意。
衆人の帰服する意。既に盛なるものは後に衰え傾く。力小にして任重き意。
《白蛾》雨戸を開き日光が差し込んで明るくなった象。



火 睽
沢 睽

上に火あり下に沢あるは睽 | 睽はそむく（乖）、反目の意。
離火は動いて上り兌沢の水は動いて下り水火の交わりを失って相背いて違い離れるに至る象。中女と少女の姉妹同じく父母の家に生育しながらしかもその嫁入りする処は各々異なるを以ってその志も亦同じからず。何事においてもその始めはふとした疑いにより迷いを生じて次第に疑念が募り、皆違い離れて終には忌み憎しむことの甚だしきに至る。



火 離
火 離

明両び作るは離 |
離は火、日、明、知性、附着。上下とも離で明るい太陽、火のような情熱、明晰な知性。火は物に麗（つ）いてその体を有つ故に麗という。自己の立場にしっかり腰を据えて、能力のある限り発揮すべき時である。しかし、情熱に任せて軽率な行動に走る傾向もある。牝牛のような柔順さを併せ持つことが大切である。



火 噬
雷 嗑

雷電あるは噬嗑 | 噬嗑は噛み合う。口の中にある物を噛み砕いて上顎と下顎が合する。
初爻と上爻との間に四爻の邪魔物が挟まっている象。その邪魔物は噛み砕いて後に漸く亨る。障害物は剛強で甘く考えていると思わぬ抵抗に遇う。上離火・下震雷で雷電、雷鳴の威力と電光の明知で全力を傾けて真正面からぶつかってゆくことが肝要。《白蛾》奥歯に物を挟んでいるようなもので、それが邪魔物になって容易に噛み合わず事が出来ない。



火 鼎
風 鼎

木の上に火あるは鼎 | 鼎は生（なま）物や堅い物を、よく煮えた柔らかい物に変革する。
鼎は食べ物を煮炊きする器であって、人の生を養い命を保つ物である。
《白蛾》鍋にて食べ物を煮る象。物事を皆変革させる意。旧きを捨て新しきを採り事を改むるによき意。新しい友を得、新しい計画のもとに再出発すれば福分を受けて成功する。



火 未
水 濟

火水上にあるは未濟 | 未濟は未完成の意。
六爻共に位が正しくなく、火水相交わらず、水火の用を為さない。小狐が川を渡ろうとして、ほとんど渡り切る時にその尾を濡らし済（わた）れない。「未だ」の字は後日に期することあるの意ゆえ能く正しきを守って未を待つべきである。
《白蛾》暁の光が海に浮かんでいる象で、これから活動の時となる意。



火 旅
山 旅

山の上に火あるは旅 | 旅は羈（き）旅の旅。
山は止まっているが火は次々に燃えて移ってゆく。恰も旅人が暮には宿舎に止まり、朝となって日が出れば又旅を続けてゆく象。そもそも旅に出るといことは、常の場所を離れて不安な行動である。石に腰をかけているように物事の手につかぬ意があるので、能く心を定めて知ある人について事を弁すべき。《白蛾》日が西山に傾くの象で疲れと寂しさの意。



火 晋
地 晋

明地上に出るは晋 | 晋は進む。
坤の上に離があって、太陽が地上に現れた象。太陽が地上に昇るとき世界は隅々まで明るくなる。
《白蛾》大地より朝日の昇る象で、立身出世をする意。

4 雷 震

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



雷 大 壮
天 壮

雷の天上にあるは大壮 | 大壮は大なるものの盛んなること。大いに盛んである意。
消長卦の一つでその勢い純陽に至らんとする象。雷が天の上に烈しくとどろいている象。大きく壮んなありさまであるが、外見ほどには実質を伴わない憾み。勇気強勢にして果決に過ぎるを戒めるべき。力不足で志気のみ剛なるの意。短気性急にして事を堪忍し難い意。
《白蛾》猛虎にさらに角が生じて暴れる象。



雷 帰 妹
沢 妹

沢の上に雷あるは帰妹 | 帰妹は若い女が帰（とつ）ぐこと。
秋に至ってもなお雷が地中に潜まずに沢上にあるため、沢は雷を慕って止まぬ象。
兌の少女が震の長男を慕って、自ら進んでこれに嫁がんとする象。
《白蛾》乙女が男を追う象で、転倒齟齬の意。



雷 豊
火 豊

雷電皆な至るは豊 | 豊は盛大、多大、充足。
震雷と離火とが共に至り、よく万物を照らし鼓動発育し、その勢い最も盛大の象。
東方に離の太陽がまさに昇らんとする象。しかし日も中天を過ぎれば間も無く西山に没し、月も亦盈れば欠けるもので、時に順って盛衰消長がある。普通人の場合は他から侮まされ、また瞞されることを防ぐべきである。



雷 震
雷 震

洊（しき）りに雷あるは震 |
震は震動、地震。地震のやってくる時人は恐れてきよろきよろするが、それを過ぎれば笑いさざめく平穩の時が来る。恐懼して身を慎んでいれば後に福が来る。
《白蛾》二つの龍が玉を競う象で、声あって形なき意。掛け声ばかりで内容が伴わない。



雷 恒
風 恒

雷風あるは恒 | 恒は常久。
雷も風も永久に易ることなく運行する。長男の夫が外にあって事を行い、長女の妻が内において事に従い、既婚の夫婦が家を保っている象。これが夫婦の常久の道である。何事も初心を忘れず、新奇に惑わされることなく方針を一貫してゆく。
《白蛾》従来通りに平凡に居れば変化はない。



雷 解
水 解

雷雨作（おこ）るは解 | 解は解散、艱難が解消する。
内卦の坎雨と外卦の震雷と相共に作って、堅氷ようやく解け、百花草木の発生する象。震の春陽の気が坎の冬陰の氷の上にあり、春の陽気が動いて坎冬の氷結を解き散らす象。内坎陰・外震動で、動いて陰の外に出るので艱難が解ける。特に当面した事態もない場合は、身の上、家業、すべて解散するという占告となる。



雷 小 過
山 過

山の上に雷あるは小過 | 小過とは小なる者が過度である意。
四陰二陽で陰が過度である。雷気高く山上にある時は、少しく上に過ぎて万物を鼓動発育することができない。卦形は背きあっており彼我共に背き離れる意。過失のある時。物事の齟齬する意。
《白蛾》鳥の飛ぶのを見ながら捕らえることができず気ばかり焦る。



雷 豫
地 豫

雷地を出でて奮うは豫 | 豫は楽しむ、怠る、予め。
雷気が地上に出た象で、雷気発動すれば万物生育して、天地に悦びが満つる。春が来るのは既に冬の間で予めその用意ができていからで、天地は四季の運行を誤るというようなことはない。楽しみ怠る。遊び過ぎ。
《白蛾》雷神が地より天に登る象で、勢い盛んな悦びの意。

5 ䷛ 風 巽

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



風 小
天 畜

風天上に行くは小畜 | 小畜は小さく蓄えること。蓄えることの少ない意。
濃い雲が湧き起こりつつも風に遮られて恵の雨にはまだならない象。六四の一陰が上下の五陽を止める象意。巽の柔順を以って乾の剛健なものの鋭く進むのを止め柔を以って剛を止め、弱を以って強を制するので少しく畜むる意。君子の道はしばし止められて行い得ぬ時はあっても、最後は必ず通る。



風 中
沢 孚

沢の上に風あるは中孚 | 孚は信（まこと）。中孚は心中に信あること。
沢の上を風が吹けば、水は虚心に風を受け、風の動くのに従って水もまた動く。上の者の誠心に下の者が感動し悦んで従ってくる。我悦び彼従い、また相互に悦び合い相互に従い合う。二人が心を同じくして物事をなす意。自他協力して事を謀れば能く和熟する。
《白蛾》大空を渡る親鶴が鳴けば子鶴がこれに和するという誠の象。万事に誠実にその分限を守ることが大切。



風 家
火 人

風火より出るは家人 | 家人とは一家の人の意。
火あれば風を生じ、風あれば火の勢い盛んとなり、恰も一家の人が互いに力を協せて家を盛んにする如くである。特に家は婦人が重要なので、女が正しければ家庭内が正しくなり、家の内が正しければ、ひいて家の外も正しくなるだろう。先ず自分の家内を能く治めて小心に勉めるときは次第に繁昌する占。



風 益
雷

風雷あるは益 | 益は増益。
否の上卦の一陽爻を損して、下卦に増した卦。上を損して下に増す。上にある君が下に恵みを施す象。䷋ → ䷗
上巽風は従う・下震雷は動く、下が動けば上がそれに応じて従い助ける。疾風迅雷、好機と見れば嵩にかかって突き進むがよい。



風 巽
風

随風あるは巽 |
巽は風。風は物に出会えば柔らかく身を避けて吹き過ぎる。へりくだる。譲る。風はどんな隙間にも入り込んでゆく。柔軟性は優柔不断にも通じる。進退に迷い不決断。
《白蛾》大風が船を覆す象で、不安難渋の意。



風 渙
水

風水上行くは渙 | 渙は氷が解け割れる意味、散る。
風が水の上を吹き渡れば水は波立ち散る象。春暖の気を以って氷結を解く意。停滞を吹き飛ばして新しい出発。
総じて新たに起こすことは大小ともに皆渙散して成就せしない。
《白蛾》順風に帆をあげる象で、意の如く進める意。



風 漸
山

山の上に木あるは漸 | 漸はだんだん進む。
山上に木のある象。漸は順を追って次第に進むことで、恰も山上の大木が、永い年月の間に、何時とはなしに成長する如きものである。
《白蛾》山中に木を植える象。生長する木を待つようにたゆまぬ努力を続けねばならない。千里の道も一歩ずつ。



風 観
地

風地上に行くは観 | 観は示す、仰ぎ見られる。
地の上に巽の風がある卦で、地上を吹く風は目に見えぬが、物を触れ動かすことによって間接に観ることができる。行動よりも静観の段階である。
《白蛾》突然大風が吹いて大地に塵埃を吹き上げるように思わぬ紛糾問題が生じて心配苦勞ができる。

6 水 坎

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



水天 需

雲天に上るは需 | 需は待つ、待つべしという意。
密雲深く垂れ込めてきたがまだ雨にならない、遠からずして降雨があると慈雨を待つ。下乾健・上坎陰で、力強く前進しようとしても前方に陰阻があるのでにわかに進めない。よく時を待ち、陰に陥らないでいる。人生には時節の到来まで隠忍自重しなければならないことが多い。焦らずに時を待つ。英気を養って時期を待てば大きな成功が期待できる。《白蛾》雪の中で梅が綻ぶ象。



水沢 節

沢の上に水あるは節 | 節は節制、節儉、節操。
沢が水を湛えている象。水が多過ぎれば堤防を破って洪水となり、少な過ぎれば干上がって草木が枯れ死んでしまう。水量に節があってこそ沢は草木を育てられる。その限界を守ってその所に止まるのを節という。節度を守る。ただし度を過ぎれば本人を苦しめる。これを苦節という。《白蛾》狐が泥の中を歩く象。自然に逆らわずに行けば徐々ながら進めるが、慌てて急ぐと泥中に足を取られる。



水火 既濟

水火の上にあるは既済 | 既済は既に成る、事の完成を意味する。既に済了（なりおわ）った意味。
六爻共に位正しく、水と火が相交わり烹飪などの諸用を致し得る。ただし、事の完成の後には退廃が来ることが予想されるので正道を固守せよとの戒めがある。既に済うという時なのでこの上はただ守ることを専らにして既に得たものを失わぬことを第一とすべき。《白蛾》白い芙蓉の上に白い霜を載せたところで白の美しさが増すものではない。



水雷 屯

雲雷は屯 | 屯は滞る、行き難む。
草木の芽が固い地面を突き破ることができない象。内に生命力を抱きながらまだ十分に伸びることができない。
前方に危険な坎があるため妄りに進めばその中に陥る。若々しい生命力でよく辛苦に耐え、屯難を抜け出して初めてその時を得る。
《白蛾》龍が水中に動く象で、まだ運氣は盛んでない。



水風 井

木の上に水あるは井 | 井は井戸。
木を以って作った釣瓶が井戸の中に入っている象。村は移り遷ることもあるが、井戸はいつまでも変わらない。井戸はいつも静かに澄んでいる。釣瓶がほとんど井戸の水面に届こうとしているのにその釣瓶が壊れてしまったのでは凶である。井は元来人を養う卦で、人に養われる卦ではない。しかも陰に従うという時なので能く辛抱しなければならない。後にはよろしい。



水水 坎

水洊に至るは習坎 |
坎は陥の意味で落とし穴。この卦は上下とも坎（陰阻）を重ねた象。次々に陰難に陥る。困難に打ちひしがれるか、苦労を重ねることで己を鍛え力を養うか。今すぐ困難を解決することは難しい。何物をも恐れぬ信念と姑息を排した至誠とをもって激流に立ち向かう以外にはない。《白蛾》宝を積んだ船が暴風雨に遇って難破する意。



水山 蹇

山の上に水あるは蹇 | 蹇は進みにくい、困難。
外卦の坎水が陰難前に横たわり、内卦の艮山の陰阻が後を塞いで進退に窮する象。山は陰しく、水は渡り難い。八方塞がり、二進も三進も行かない。
《白蛾》龍が玉を失う象。



水地 比

地上に水あるは比 | 比は親み助け合うこと。
比は相比（なら）ぶ象で、比べば親しみ、親しめば楽しむ。恰も水と地が和合する関係の如き象。九五が陽剛で上下の五陰爻がこれに比（した）しみ従っている。寛容の気持ちで人に接してゆけば、やがて多くの人の協力を得て大事業が完成できる。
《白蛾》多くの星が北斗に従う象。

7 艮 山 良

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



山 大畜
天 畜

天山の中にあるは大畜 | 畜は、止めると畜聚の二つの意味を含む。
艮の制止を以って乾の鋭進をとめる象で、剛強にして妄進するものを止める。止めることの大きなる故に大畜という。天が山の中に包蔵される。大きなものを中に蓄える象。実力を蓄える意。大志を抱く意。
《白蛾》山中に潜む龍がなんとかして天に登ろうと焦る象。



山 損
沢 損

山の下に沢あるは損 | 損は損減、損失。
泰の下卦の陽爻の一つを減じて上卦に増した卦で、下を損（へら）して上に増す。☳→☱。
山の麓の沢、沢が己を低くしてこそ、山はより高くなる。単なる損害ではなくむしろ奉仕に近い。目前の利潤を損しながら正を守って後日の利益を得ることを心がけるのがよい。



山 賁
火 賁

山の下に火あるは賁 | 賁は飾る、装飾。
山の下に火がある象。夕映えが山の草木百物を美しく彩っている。しかし同時に没落寸前の輝きをも暗示する。この卦は修飾を意味するが、「飾るべし」「飾らせよ」「飾ってはならぬ」などの意を一卦の中に具備しているので占的の如何によって活用しなければならない。《白蛾》明るさが遠くまで及ばない。



山 頤
雷 頤

山の下に雷あるは頤 | 頤は養う。本来は「おとがい」。
この卦は口を開けた形。口は食べ物を取り込んで体を養うから頤に養の意味が加わる。自分自身を頤（やしな）う手段として何をしているかをよく見ること、それが貞（ただ）しければ吉。病は口より入り、禍は口より出ず。飲食言語には特に注意。



山 蠱
風 蠱

山の下に風あるは蠱 | 蠱は皿の上に蟲が乗っている。破敗、困惑、溺没、傷害。
風が山下に閉息して、物が腐敗して虫を生ずる象。必ずこれを改革しなければならないし、又それをなすには迅速でなければならない。腐敗と混乱の時は、同時に革新・新生の時でもある。既に敗れたる跡を後日に再び修復する意。



山 蒙
水 蒙

山下に泉を出だすは蒙 | 蒙は蒙昧・幼稚。
蒙は無知蒙昧な幼児の状態を表す。幼児の無限の可能性を実現するにはよき指導者につかねばならない。前面に山があるけれども麓の水気に覆われ、暗くて見ることができない。霧が晴れるまで待つ。山の麓に湧き出た泉は細く頼りないが、やがては大河となり、遂には大海に至る可能性を秘めている。《白蛾》険しい山に雲のかかる象で、行く道がわからなくなる。



山 艮
山 艮

兼ねたる山あるは艮 |
艮は止まる。山が二つ重なったのが艮卦である。山と山と重畳してどっしりとその場所に止まっている。心が止まるべき所に止まっていれば身体が動いてもそれについて心の動くことはない。沈思黙考、輕挙妄動を慎む時。
《白蛾》山上の関所が閉ざされた象で、進もうとしても進まれない足踏みの意。



山 剥
地 剥

山地に附けるは剥 | 剥とは剥落。
山が地に付く象。山は恰も刀で切り取られるように、次第にその上を剥ぎ去られ、崩れて地に付き、平地となる剥尽の象。下に陰が成長して僅かに残る一陽が今にも剥ぎ落とされ尽きようとしている。隠忍自重して一陽来復を待つ。冬来りなば春遠からじ。
《白蛾》枯れ木に花が咲く象で、旧を去って新を生ずの意。

8 ䷁ 地 坤

大象伝 | 卦意
卦の象意、《白蛾》易学小筌



地 泰
天

天地交わるは泰 | 泰は安らか、安泰、通るの意。
天が下に地が上に在って、一見上下転倒しているようであるが、天の気と地の気と相交わり、万物亨通してよく生育する象。人間で言えば君主と臣下が交わってその気持ちが相通ずる。君子の道長じ小人の道消する象。安定した繁栄であるが怠慢にして奢りやすい象があり慎戒の要がある。



地 臨
沢

沢の上に地あるは臨 | 臨は進み逼（せま）る。
陽がようやく成長して下から進んで陰に逼っている。運気が次第に盛運に向かう時。
地の底に水が浸み入るように互いに相臨む象。上より下を臨み見、下より上を臨み見、上下相互に相臨む。
《白蛾》母より少女を愛し、少女より母を慕う意。



地 明夷
火

明地中に入るは明夷 | 夷は傷つく、やぶる。太陽の明るさが傷つけられるという意味で明夷（明やぶる）。
地中に太陽の没した象。賢明なる者が傷つき害される。暗愚な者が上にあって才能のある部下を抑え付けている。この卦を得た時の判断として、艱難を自覚して、韜晦して身を守るがよい。



地 復
雷

雷地中にあるは復 | 復は返る。
地中に雷ある象で、季節にすれば冬至に当たり、雷気が再び地中に復ってくる時。徐々に春が立ち返る。ただし、陽は再び生じたばかりでまだ微かな時。安静にしてこの微陽を養ってやらねばならない。



地 升
風

地中に木を生ずるは升 | 升は進み上る。
内卦の巽の木の実が芽を生じて、外卦坤地の上に出で、次第に生長して高く昇り進む。升ると名付けられた卦ではあるが、今直ちに升り進むのではなくて、後日に至って次第に伸長して升進すべきものなので、時を以って升るの「時」の一字に意をとどむべき。



地 師
水

地中に水あるは師 | 師は軍隊（師匠の師ではなく、師団の師）。
地は水の潤いによって万物を生育するもので、地と水は相親しむべき性のものであるが、この卦は水が地の下のあるため、各々正当な位を得ず却って相背き、或いは争いを起こす象。戦は大意名分があり、将軍が有能であれば結果は吉。口論争撃の象。一人で衆と争う象。陰に順うという時なので千辛万苦してなおかつ勉め励むべき。



地 謙
山

地中に山あるは謙 | 謙は謙遜、謙虚。
山が地の下に在って、恰も高さ位置の者が謙遜して下位に下るが如き象。謙は自分に良いところがありながら自負しない。己を虚しくして人にへりくだる。優れた才能は謙虚であることによってより一層輝きを増す。へりくだりすぎている時なので、奮発して努力する必要がある。



地 坤
地

地勢は坤 |
坤は大地の象。大地は静止しているが豊かな力を蓄えて万物を生み育てる。乾に対して、柔弱、消極、女性的である。坤は消極を守ることで積極をしのぎ、後（おく）れることで先に立ち、柔よく剛を制する道を示す。《白蛾》今は冬枯れで憂に閉ざされ辛労苦難があるが、ここを忍べば春となるので、十分に注意して大過なきよう春を迎えるように努力すればよい。